中学生の対人恐怖-自己愛傾向と不安症状の関連

○岡村寿代¹・清水健司²

(¹兵庫教育大学発達心理臨床研究センター・²信州大学人文学部)

キーワード: 対人恐怖-自己愛傾向, 不安症状, 中学生

Social Phobic-Narcissistic Tendency and Anxiety

Hisayo OKAMURA¹ and Kenji SHIMIZU²

(¹ Center for Research on Human Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teacher Education,

²Faculty of arts, Shinshu University)

Key words: Social Phobic-Narcissistic Tendency, Anxiety, Junior High School

目 的

本研究では、清水・川邊・海塚(2007)が作成した対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデルを用いて、中学生の対人恐怖心性-自己愛傾向を 5 類型に分類し、5 類型と不安症状との関連を検討することを目的とする。

清水ら(2007)が作成した対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデルは、岡野(1998)の枠組みをひな形としたものであり、横軸に“恥に対する敏感さ”として対人恐怖心性(過敏特性次元)を、縦軸に“自己顕示欲の強さ”として自己愛傾向(誇大特性次元)を布置している。そして、両軸の尺度得点がともに±0.5SD の範囲にあるものを中間型とし、各尺度得点の強弱によって誇大-過敏特性両向型、過敏特性優位型、誇大-過敏特性両貧型、誇大特性優位型の 5 つに分類している。

これまでの研究では、大学生を対象として 5 類型ごとの性格特性と精神的健康が検討されているものの(清水・川邊・海塚, 2008), 中学生を対象とした研究はほとんどない。思春期は、思春期心性も加わり、対人関係の問題がより重篤になることが指摘されている。対人恐怖症の発症が 10 代半ばということとを考慮すると、早期発見、早期介入のためにも中学生の実態を把握する必要がある。本研究では、対人恐怖心性と不安症状を取り上げ、対人恐怖心性が不安症状のどの側面と関連するかについて検討することを目的とする。

方 法

研究対象

H 県内の中学生 234 名を対象に、2008 年 10 月にホームルームにて無記名、集団で実施した。

調査内容

1. 対人恐怖-自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版(以下、TSNS-S): 清水(2006)が作成したものを使用した。この尺度は、2 つの下位尺度からなっており、対人恐怖心性尺度 10 項目、自己愛傾向尺度 10 項目の合計 20 項目について“全然あてはまらない: 1”～“非常にあてはまる: 5”の 5 段階で評定するよう求めた。
2. Spence Children's Anxiety Scale (SCAS): Spence(1998)によって作成された児童の不安を測定する尺度である。回答は、項目に示された内容を普段の生活でどの程度経験するかについて“全然ない: 1”～“いつもそうだ: 4”の 4 段階で評定するよう求めた。

5 類型の分類基準

対人恐怖-自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版の下位尺度ごとに総得点を算出し、それぞれ平均値で折半した。さらに、両下位尺度得点が±0.5SD の範囲にあるものを中間型とし、5 類型に分類した。

結 果

1. 5 類型の人数と比率

5 類型の人数と人数比率を求めたところ、Table 1.の結果が

得られた。この結果より、誇大-過敏両向型、誇大-過敏両貧型が全体の約半数を占めていることが示された。

Table 1. 5 類型の人数と比率

	人数	人数比率
①過敏特性優位型	39	15.6%
②誇大特性優位型	36	14.4%
③誇大-過敏両向型	61	24.4%
④誇大-過敏両貧型	56	22.4%
⑤中間型	42	16.8%

2. 5 類型と不安症状の関連

5 類型と不安症状の関連を検討するために、不安症状の下位尺度ごとに、1 要因の分散分析を行った。その結果を Table2 に示している。下位尺度のすべてにおいて、過敏特性優位型、誇大-過敏両向型がほかの 3 群よりも得点が高いことが示された。

Table 2. 対人恐怖心性-自己愛の5類型による不安症状の平均値、SD、およびF値

	①	②	③	④	⑤	F値	多重比較
分離不安	4.18 (3.97)	2.31 (2.60)	3.79 (4.35)	1.27 (1.81)	2.50 (2.30)	6.72***	④<①, ③
パニック	7.97 (5.83)	2.03 (2.52)	5.33 (4.70)	1.48 (2.30)	3.02 (2.88)	20.73***	②, ③, ④, ⑤<① ②, ④, ⑤<③<①
心配	5.74 (3.12)	2.53 (2.26)	4.57 (2.98)	1.64 (1.83)	3.29 (2.58)	18.44***	②, ④, ⑤<① ②, ④, ⑤<③, ④<⑤<①
特定の恐怖	3.90 (2.61)	1.94 (1.88)	3.41 (2.52)	1.71 (1.94)	2.00 (1.96)	9.13***	②, ④, ⑤<① ②, ④, ⑤<③
強迫傾向	1.77 (1.61)	1.06 (1.41)	1.74 (1.28)	.52 (0.87)	1.05 (1.27)	8.86***	④<①, ④, ⑤<③
不安障害傾向	23.56 (11.55)	9.86 (7.62)	18.84 (13.27)	6.63 (5.91)	11.86 (7.79)	22.95***	②, ④, ⑤<① ②, ④, ⑤<③

①過敏型、②誇大型、③誇大-過敏両向型、④誇大-過敏両貧型、⑤中間型

考 察

対人恐怖-自己愛傾向と不安症状を検討したところ、過敏特性優位型と誇大-過敏両向型の不安症状の高さが示された。両群に共通しているのは対人過敏性の高さであることより、この要因が不安と関連することが示唆された。しかしながら、清水ら(2007)の研究によると、過敏特性優位型と誇大-過敏両向型の臨床像は異なっていることから、同じ不安症状を呈していても、不安症状への対処法は異なることが示唆された。

引用文献

- 岡野憲一郎(1998) 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで— 岩崎学術出版社
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎(2007) 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, 78, 9-16.